

創立60周年を期して さらなる飛躍を

一般財団法人 全日本労働福祉協会 会長 柳澤 信夫

全日本労働福祉協会は昭和29（1954）年7月に開設し、今年60周年を迎えます。

平成24年度には健康診断受診人員は84万5千人、作業環境測定は1438事業所で実施いたしました。これらの活動は、本部、首都圏事業部、旗の台健診センター、青森、茨城、群馬、長野、東海の6支部および東海診療所が担当いたしました。当協会の活動につきまして変わらぬご指導、ご支援を賜りました。行政、企業、労働基準協会をはじめご関係のみなさまに深く御礼申し上げます。

戦後の復興、経済発展の時期に、当協会は主として中小企業に働く人々の健康を守るための健診事業、労働環境の測定を主な活動として発展してまいりましたが、21世紀を迎えての超高齢社会、生産年齢人口の減少に向けて、

健診機関の役割も変わらざるを得ない状況にあります。

当協会は平成25年4月1日に一般財団法人に移行登記をいたしました。それを機会に設立の目的および主たる事業を改めて検討し、定めました。主な目的として、働く人々とその家族、学生、地域住民の方々の健康保持・増進に役立つ活動を全国的に展開してまいります。これらの方々の健康確保と福祉増進に必要な事業を行います。そしてこれからの時代に、最も大切な国民的課題である働く人々の健康確保に向けて、従来よりもいっそう幅の広い活動に取り組み所存であります。

近年の勤労者保健の重要な課題として、「健康日本21」の目標に沿った生活習慣病予防のための特定健康診査、特定保健指導、過重労働による健康障害の予防、自殺者の総数は減少したも

の依然として大きな課題である職場におけるメンタルヘルスなどがあります。

さらに有害環境や有害物質を扱う作業現場で働く人々に対する特殊健康診断も、新たな有害物質の発見、医療の進歩に伴う健診項目の見直しが定期的に行われております。

また労働人口の減少に対する、女性の就労環境の改善、高齢者の労働安全対策も、私たち健診機関の大きな課題となります。

当協会はこれらの課題に 대응するために、一人ひとりの受診者の健康診断を超えて、働く人々の環境を整えるための事業所への努力、そして勤労者個人および事業所に対する法令普及、健康増進のための講習会、講演会、研究会の実施、そして各種資料および刊行物の頒布を実施する所存であります。

そのために当協会は平成25年に2つ

の新しい取り組みを行いました。その1つは

2年をかけて完成した新しい「健診総合システム」の実施です。本部、支部ともに統一して、事業所のみなさまに必要な有用なデータを迅速に提供する目的で作成し、必ずみなさまの期待に添えるものと存じます。もう1つは新たな課題に対応するための内部組織の改革であります。その中で「健康事業部」は健康診断をさせていただいたみなさま個人、および事業所のご要望に応える体制を作っております。

これからのわが国を「健康社会」(healthy society)に、そしてみなさまの事業所を healthy company にするためのお手伝いをさせていただくことが、当協会の目的と考えております。どうぞ今後ともいっそうのご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。



創立60周年を祝して

公益社団法人 全国労働衛生団体連合会 会長 紀陸 孝



一般財団法人全日本労働福祉協会が創立60周年を迎えられましたことを、心からお喜び申し上げます。

貴協会は、昭和29年設立以来、常にわが国の産業保健活動の中心的な役割を果たし、東京都のほか6県に支部を展開してこられました。これはひとえに貴協会役職員のみならず、さまの産業保健に対する熱意と努力の賜と深く敬意を表します。

さて、全衛連（公益社団法人 全国労働衛生団体連合会）は貴協会の設立に遅れること15年、昭和44年に設立されました。今こそ全衛連は全国の120を超える主要労働衛生機関が結集する一大勢力となっておりますが、設立当初は20団体からのスタートでした。初代会長は貴協会の阿賀正美氏が推

戴されました。

全衛連の設立趣意書に、「我々健診機関は、この際お互いに結束・協力して、相互に情報交換し、或いは研修研鑽することによって、健診方法の問題、検査技術向上の問題、健康管理事後措置の問題、その他について積極的方策を講じ、もって新時代に即応した健診体制を整備し、健診機関全体の機能のレベルアップを図るべき時である。」とあります。40有余年経た今日、全衛連事業の基本は依然としてここにあります。その意味で、貴協会をはじめ、当初結集した20の先駆的労働衛生機関は、将来を見据え、時代を展望していたのだと改めて感じ入ります。

私は平成25年度の定時総会において会長に選出されましたが、先人の残したこの趣意書

の精神を受け継ぎ、会員一丁を踏まえた事業展開を行っていかうと考えております。とりわけ、全衛連の基幹業務であります総合精度管理事業、労働衛生サービス機能評価事業、教育研修事業を充実・強化することによって労働衛生機関のサービス品質のいっそうの向上を図り、もって働く人々の健康確保・増進に貢献してまいりたいと考えております。

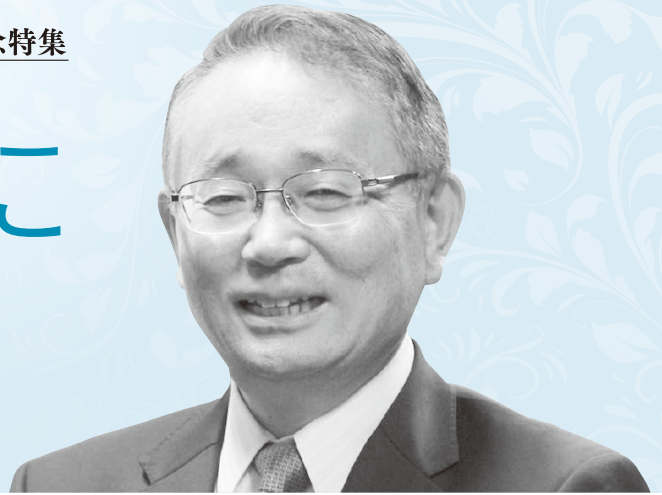
また、現下の産業保健の最大の課題であるメンタルヘルズ問題への対応も急務です。全衛連は平成22年度より定期健康診断時にストレスチェックを実施し、必要な方には個別面接しストレス対処法等の指導を行うとともに、事業所に対しては職場改善のアドバイスをする「心とからだのトータルチェック」のサービスを提供しております。貴協会におかれましても、いち早くサービス提供機関として登録していただいております。感謝申し上げます。

これに関連しまして、ストレス検査の実施を事業者に義務付けること等を内容とした労働安全衛生法改正案が平成26年通常国会へ提出されたと聞いております。改正案の内容は全衛連の「心とからだのトータルチェック」とチェック項目の数こそ違え、ほぼ同様の仕組みと理解しております。全衛連は健診機会を活用したストレスチェックサービスの先駆者として、今後予定される改正法的確にに対応していきたいと考えておりますので、よろしく願っています。

貴協会におかれましては、創立60周年の記念すべき年を迎えられたことを契機として、産業保健活動をいっそう充実され、これまで蓄積された豊富な実務経験を十分発揮され、さらなる飛躍を遂げられますよう祈念して、お祝いの言葉とさせていただきます。

創立60周年によせて

日本生命保険相互会社 取締役専務執行役員 本山 孝



この度は、財団創立60周年誠におめでと
うございます。また、長年にわたり、
弊社の健康管理にご尽力いただき、深謝申し
上げます。

さて、以下貴財団のご協力により、弊社ま
たは私自身を取り組んでいる健康管理をご紹
介し、祝辞とさせていただきますと思います。

日本生命の健康管理

(財)全日本労働福祉協会のご協力による受診

弊社では、定期健康診断を年1回実施して
おり、東京本部を中心に全国の支社で多数の
職員が、貴財団のお世話になり受診していま
す。また、一般的な健康診断に加えて、受診
者が希望して受けることのできるオプション検
診(胃検診、大腸がん検診、腹部エコー検診、
乳がん検診)でもご協力いただいています。

健康に対する関心は年々高まっていると感
じており、弊社ではとりわけ次の2点について、
職員への働きかけを強化しています。

1つは、弊社従業員の約9割を占める「女
性」への乳がん・子宮がん検診の受検勧奨です。
約6万名の女性職員が元気に活躍することは
弊社の発展にもつながることであり、女性の
健康増進・受検勧奨に努めています。

2つめは、「糖尿病」対策として、健康診
断で糖尿病と指摘された職員に対して医療機
関への受診勧奨、産業医によるフォロー面談
を実施し、重症化予防策を進めています。ま
た、「ニッセイ健保組合では機関紙『はつらつ』(年
4回発行)を通じて、糖尿病に関する地道
な啓蒙活動を実施しています。

私の健康管理

私は、学生時代は野球に励んでおりました
が、入社以降、スポーツをする機会が減り、
また営業に携わる仕事の関係上、不摂生も

重なり、徐々に体重が増加してきました。こ
のままでは健康を害しかねない。仕事はもち
ろんのこと、プライベートも体が健康でなくて
は楽しいない。その思いで一念発起して、減量
に励み始めました。

早朝に、1kmのウォーキング、その後3〜
4kmのランニングを月に15日〜20日程度、約
6年間続けています。最初は辛いときもあり
ましたが、徐々に体重も減り、また足腰の筋
力強化にもつながっていると感じています。

最近では少し余裕もでき、四季折々の風景
を感じながらランニングをすることは、私のリ
フレッシュタイムにもなっています。ゴルフの際
にも、極力カートに乗らず、歩くようにして
います。森林の緑に囲まれ、マイナスイオン
を浴びながらコースを巡ることは大変気がい
いものです。

やはり、人生を楽しむ上で、「健康」であ
ることが一番大事です。これからも健康に留意
しながら、仕事に、プライベートに充実した日々
を送っていききたいと思っています。

安心できる「みらい」をお客様と 一緒に創っていくために

私たち、日本生命は保険に関するすべての
仕組みをお客様の視点から見直し、システム
インフラを抜本的に刷新した新統合戦略を、
平成24年度より本格展開しております。同時
に3力年経営計画「みらい創造プロジェクト」
を策定し、「新契約販売量の増大」「財務・
収支基盤の強化」「人材」の育成」の3本
柱を軸に取組みを進めています。

その中で、「進化した保障」「進化したIT」
「進化したサポート」の3つを融合した新た
な総合保険サービスをご提供しております。

まず「進化した保障」について、お客様に
とってわかりやすくシンプルな保障内容をコン

セプトに、平成24年4月「みらいのカタチ」
を発売しました。おかげさまで発売より約1
年半が経過する中、販売件数は160万件※
を突破し、大変ご好評をいただいております。
また今年の4月より「ニッセイ学資保険」等、
3つの商品を発売し、商品ラインアップの充
実を図りました。加えて、付帯サービスの充
実にも力を入れており、優秀な専門医を無料
で紹介する「ベストドクターズ・サービス」、
無料介護訪問サービスである「ケア・ガイダン
ス・サービス」、お子様の健康や育児に関する
無料電話相談が可能な「育児相談はつとライ
ン」を提供しております。

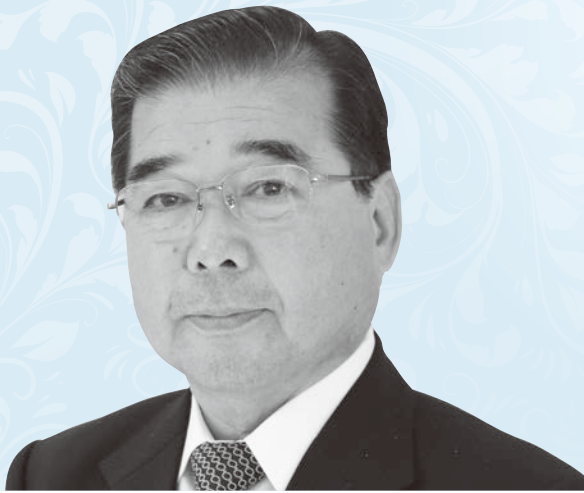
次に「進化したIT」について、営業職員
の携帯端末、REVO[®]の導入により、ライ
フステージを捉えたコンサルティング提案、お
手続きのペーパーレス・印鑑レス等、お客様の
利便性向上に努めております。

最後に、「進化したサポート」として、主
力チャネルである約5万名の営業職員に加え、
全国に98店舗を擁する来店型店舗のニッセイ・
ライフプラザ、独自のお客様ネットワークを有
する1万店以上の代理店等、幅広くお客様に
アプローチできる体制を整備しております。

これら取組みも、弊社職員が健康であって
こそのものであり、日頃よりご尽力いただい
ている貴財団には大変感謝しております。今後
とも未永く、弊社の健康管理にご協力いただ
きますようよろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、貴財団の60周年を心よ
りお祝い申し上げます。ますます発展
されることをお祈り申し上げます。

※複数の保険契約を組み合わせ加入している
商品を1件とした場合の販売件数です。なお、
それぞれの保険契約を1件とした場合の販売
件数は700万件を突破しました。



次の創立70周年をめざして

一般財団法人 全日本労働福祉協会 専務理事 三好 正美

私

ども全日本労働福祉協会は、おかげさまで、このたび創立60周年を迎えることとなりました。これもひとえに、今日までご指導・ご支援いただきました厚生労働省はじめ関連諸団体のみなさま、健診業務をサポートしていただいた関連業界のご支援、そしてなんといいまでも、この長い間、ご利用いただきました各事業所のみなさまのおかげと深く感謝申し上げますとともに、厚く御礼申し上げる次第でございます。

戦後間もない、昭和29年に「働く人々の健康をお守りする」という目的で、財団法人として発足し、労働安全衛生法に基づく健康診断や特殊健康診断、そしてまた安全な職場環境を維持していくための環境測定業務など、事業所様の安全、安心を側面からご支援させていただくことを協会の趣旨に掲げ活動してまいりました。

そしてこの長い道のりの過程では、幾多の困難な時期もございましたが、その都度、みなさま方のご支援・ご協力をいただき乗り切つてまいることができました。あらためて御礼申し上げます。

そして、次の世代を目指し昨年4月、新たに「一般財団法人」として再出発をいたしました私たちがどうあるべきか考えてみたいと思います。

「病気を見つける健康診断から、健康をつくる健康診断」へ

さて職域で行われております健康診断も、この長い歴史の中でいろいろな変遷がありました。それは定期健康診断から始まって、生活習慣病（成人病）健診が加わり、そして平成20年からは、特定健診、特定保健指導が導入され、生活習慣からくる肥満等の予防など、いわゆるメタボリックシンドロームのため

の健康診断が始



まったわけでございます。また最近では、過重労働問題やそれらからくるストレス問題など、心のケアとしてのメンタルヘルスへの取り組みが最大の課題とされるようになってきております。

そしてこのような時代に私ども健診機関が果たさなければならぬ役割は、その時代の変化にいち早く対応し、みなさまにご提供できる体制を整えることにあります。

さらにこの健康診断が「病気を見つける健康診断」に終わるのではなく、事後措置としての保健指導などを通して、お一人おひとりの健康を確保すること、すなわち「健康をつくる健康診断」、それをご提供できることを最重点として推進してまいりたいと思っております。そのために協会内に健康事業部を新設し、保健師の充実や、産業医体制などの対応能力の充実に努めております。

「スムーズな健康診断」だったといわれることを目指して

職域の健康診断は、正確な健診をきちんと行うことももちろんですが、加えて業務に極力影響の出ないよう十分配慮し効率的に行わなければなりません。その点私たちは、巡回健診のバイオテラとしての長い経験と豊富な実績をもとに直接現場に向き健康診断を行わ

せていただいております、十分そのご期待にそえることができるものと確信いたしております。

そして受診者の方々に満足していただける健康診断を行うことが、私たちの運営の指標であります。そのためにも受診者の方々から、今日の健康診断は、「スムーズな健康診断」だったねと言われること、そんな健康診断を行えることを常に目指してまいります。

「最新デジタル機器での健康診断」「新システムでの対応」より質の高い健康診断を目指し、みなさまから信頼を得られるように努力してまいります

ここ10年のIT・デジタル化の進展は目を見張るものがあり、私たち健診業界にも大きな影響を与えております。

特にレントゲン機器など健診機器のデジタル化は、フィルム交換の手間が無くなり健診現場での省力化に大きく貢献していますが、それに留まらず検査手法に大きな変革をもたらし、検診精度の飛躍的な向上につながっております。このような新しい機器を積極的に取り入れ、変化をもたらすように努めてまいります。

また、2年前から構築しておりました、新健診総合システムがスタートしており、受診者のみなさまにお届けする結果票が見やすくより充実したものへと姿を変えました。

このように、従来の形にとらわれることなく、積極的に新しいものを取り入れ、みなさまのお役に立つよう運営してまいります。創立60周年を迎え、次の創立70年へのスタートをいたしました全日本労働福祉協会を、これまで同様ご支援賜りますようお願い申し上げます。

これからの 健診項目について

胃がんのリスク度を調べる 「ABC検診」

最近、職場や地域の健康診断で「ABC検診」が取り入れられるようになってきました。これは、胃がんや胃潰瘍の危険因子である「ヘリコバクターピロリ菌」の有無（血中抗体価）と、胃がんと関連の深い疾患である「萎縮性胃炎」の程度（血中ペプシノーゲン値）を測定し、胃がんについてのリスク度を測定しようとするものです。

ABC検診はあくまでリスク検診であり、早期発見のためにバリウムを用いた胃のX線検診や内視鏡によるスクリーニングとは異なります。そのため、健康診断の受診者がリスク検診とスクリーニングとの違いを理解しているかどうかが問題となります。私自身も、ABC検診でAランクと判定された方が、1カ月後に末期の胃がんが見つかり、ご遺族から厳しい叱責をこつもつた経験があります。

また、ABC検診の結果、Aランクであれば「3年に1回、胃の内視鏡の検査を受ければよい」というカテゴリになっていますが、本当に3年間は胃がんにかからないという保証ができるかどうか、私自身はとても言いきる勇気は持ち合わせていません。あくまで確率論だからと

いつても、一般の方には到底理解できないレベルだと考えています。このことについては、今後もEBM (Evidence-Based Medicine・根拠) に基づいたしっかりした評価が行われなければなりません。

予見医学について

私の恩師である故・重松逸造先生が、今から10年ほど前に遺伝子診断が始まったころ、これからは予見医学が発達するだ

ろつと言われていたことを思い出します。

今後、遺伝子分析や免疫科学が発展すれば、健康診断でも現在病気にかかっているかどうかのスクリーニングから、将来がんなどの疾患にかかりやすいかどうかのリスクを予見することができるようになるかもしれません。それは喫煙などのように単なる生活習慣における危険因子ということではなく、体質や免疫レベルからリスクを予見するものです。日

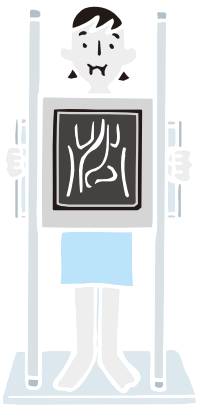
常生活におけるQOLを大事にする社会的傾向の中では、今後もさらに研究が進められなければならない分野です。

肝炎ウイルスの 抗体価検査について

肝炎ウイルスの抗体価検査については、以前からHBS抗原・抗体ならびにHCVの抗体検査が一般的なスクリーニングとして行われていますが、最近ではHBC抗

最近の健康診断の 話題 あれこれ

一般財団法人 全日本労働福祉協会
旗の台健診センター長 医師
川口 毅



体の検査が有用であるといわれています。この検査はHIV感染の早期から陽性を示し、生涯にわたって消えることがないことから、一部の健診機関で取り入れられるようになってきました。いろいろなウイルス型の肝炎が発見されることに伴って、ウイルスの各型に応じた検査が行われるようになってきています。

糖尿病の検査について

糖尿病の検査においても、これまでの血糖値やHbA1cのほかにも尿中IV型コラーゲンの測定も、糖尿病性腎症の早期診断に有用であるとの報告もされています（東京女子医大糖尿病センター花井豪助教授）。あわせて血糖コントロールの指標であるHbA1cも糖尿病性網膜症の予測因子としても有用で、今後臨床治療や健康診断の場での指導に使用される可能性があることが提案されています（同上、廣瀬晶講師）。

このように医学の発達に伴って、健診項目の意義の見直しや取り入れが行われることになるでしょう。健康診断はあくまでスクリーニングであり、どこまでを二次スクリーニングで行い、二次スクリーニングから治療までどのようにつなげていくかのシステム構築が最も大事です。健康診断の結果を治療や予防、ひいては健康増進にまで活かすことが本来の目的なのです。

日本ではまだまだあまり普及していません

が、欧米ではEHR (Electronic Health Record System) を利用した新しい健康情報管理システムが定着しつつあります。これは医療機関や健診機関で行われた検査情報をカードシステムに入れて、臨床や健康管理に役立てようとするものです。我が国においても、今後このようなシステムが取り入れられるでしょう。

健康診断の評価と今後について

我が国において、健康診断の評価はこれまでほとんど行われてきませんでした。「なんとなく予防は大事」だとか、「健康診断さえ受けていれば、健康が維持できる」という漠然とした気持ちで健康診断を受けている場合が多いように思われます。特に産業保健の分野における健康診断は、法律で決められているから仕方がないので受けている、という事業所も少なくありません。健康診断の目的を明確に理解し、さらにその目的を高めるためにはどのようにすればよいかということ、真剣に検討すべき時代がきていると感じています。

健康診断の評価方法として、敏感度や特異度という精度にかかわる評価のほかにも、「費用—効果」や「費用—便益」などのような医療経済効果の評価が重要です。私は特に「費用—効用」のよきな質の評価が大切だと考えています。

健康診断の「早期発見・早期治療」

という効果は、大事な目的の一つかもしれませんが、生活習慣病やメタボリックシンドロームが重視される健康診断では、「早期発見・早期予防」が大切で、健診結果を第一次予防につなげることが重要です。

特定健診・特定保健指導が始められたときに、健康診断から治療へという流れだけでなく、運動や栄養指導などを中心とした第二次予防への流れにものせていくように仕組みを作り上げました。なかなかそのような流れにはのついていけないのが現状です。私は、健康診断は単に疾病のスクリーニングの場というだけでなく、大事な健康教育の場だと考えています。そのために健康診断の場には医師の診察が組み込まれているのであって、単にお客さんの顔色をみて聴診器をあてて終わりにするような医師の健康診断なら、わざわざ医師が行う意味はないと考えます。最近では臨床の場でも医師が聴診をしなくなっています。検査データをパソコンで見ながら、患者との対話もほとんどなしに薬や臨床検査処方を出して終わりというのが多いそうです。

臨床検査成績だけがEBMではないことを強調しておきたいと思っています。少なくとも健康診断は予防医学であり、お客様（あえて患者さんとはいいませんが）と医師をはじめ、保健医療スタッフとの大事な接点なのです。特に産業保健の分野では、基本的に相手は、軽度の生活習慣病の予備群も含めて健康であり、

日々元気に作業に従事している人たちです。それらの人たちに必要なのは、予防のための健康教育であり、リスクに対する気づきを与えていくことです。少なくとも健康診断に携わる医師は、臨床検査万能主義や薬依存のドグマチズムには陥らないでほしいと思います。

これからの健康診断は、ただ漫然とMass（集団）を対象に画一的な検査と事後指導を行っていくのではなく、個々の生活習慣や作業態様に応じたテーラーメイドの健康診断が求められていくでしょう。

欧米では日本式の集団健診はほとんど行われておらず、どちらかというと人間ドック型の健康診断が一般的です。私は日本的な集団健診は、公衆衛生的な視点から見てそれなりの効果を上げてきたし、行動科学の視点から見てもそれなりの意義はありますが、やはりこれからはもつと個々の特性を重視した健康診断と事後指導が大切だと思います。そのためには産業医や健康診断にかかわる医師が「健康診断はこうあるべきだ」というしっかりした理念を持って取り組むことが大切なのです。



人生の一区切り を迎えて

一般財団法人 全日本労働福祉協会 前放射線技師長 齋藤 弘



40 数年、あつという間でした。そして一
区切り(定年)を迎えました。

世の中の流れとともに、健康診断も大きく変わりました。結核予防法から始まり、じん肺法、有機溶剤中毒予防規則・特化則(特定化学物質障害予防規則)等に基づき、ほとんど健康診断者数は増えていきました。対象も企業健診から生活習慣病(成人病)健診やがん検診へと移り変わり、ただ健康診断をしていけばよい時代から、より「質の高いサービス」が求められるようになってきたと感じます。

自分の仕事人生を振り返ってみると、長野県支部における3年間の単身赴任の経験はとても大きなウエイトを占めています。

入社した頃、できたばかりの胃・胸部レントゲン車の助手席に乗り、長野県支部をよく訪問していました。東京から向かう道程には、後押し機関車が付かなければ越えることのできない碓氷峠という難所があり、その峠を越えるには重いレントゲン車もエンジン全開で、また、オーバーヒートを避けるため、何度も休みみの運行でした。

やっこの思いで峠を越えると、今度は長野から松本にかけて、犀川に沿ったくねくねとした細い河原沿いの道が続く、対向車線に大型車が来ないことを願いながら移動したことを今でも覚えていいます。

それから30数年が経ち、長野県支部長として赴任したとき、その変わりようにはびっくりしました。長野駅まで今では新幹線で1時間半、都内から日帰り出張の範囲となり、高速道路も整備されました。長野県支部も長野冬季オリンピックで大きく様変わりした地域に、ガラス張りで堂々たるさまを呈しています。

その長野県支部では、放射線技師としての業務から一転。支部長として長野県支部の事

業運営、内部管理、対外折衝等、多種多様な仕事に従事することになり、「自分は今まで何をしてきたのだろうか?」と何度も考えたものです。また、それまで充分熟知していなかった健康診断のノウハウを学べたのは言うまでもありません。

自分が長野県支部における在任中、支部長として職務を全うできたかはまだ疑問ではありませんが、あつという間の充実した3年間でした。

また、自分にとって大きな転機となった事項がもう1つあります。それはここ数年の放射線機器のデジタル化でした。

フィルムセットから条件設定と確認、撮影現像に至るまで、その工程すべてがリスキーだったアナログ時代を過ごした私にとって、撮った瞬間、写真をその場で確認できるようになるなんて、夢のようでした。思えば長く技師を続けてきたものだと思えました。

ただし、その技術を享受するには、多くの困難が待ち受けていました。以前は機器トラブルも長年の勘や各機器の癖などを思い起こして対応し、ちょっとした応急処置で乗りきってきましたが、デジタル機器ではそうはいきま

せん。デジタル機器に対する知識に加え、コンピュータの知識が必要とされるのです。慣れないキーボード操作、マウスクリック、画面が固まった。必要のない力を使い、肩が、首が、腕が悲鳴をあげます。とにかく、コンピュータがへそを曲げたらうちもさっさと行きません。若い世代に教えを乞い、何とかこの困難も乗り越えました。

次に、3年前起こった東日本大震災により発生した福島第一原子力発電所の事故は、学生時代に学んだ「眼で見ることのできない放射線の恐ろしさ」を、再度思い返すこととなりました。

放射能と放射線の違い、ベクレル(キュリー)・シーベルト(レントゲン)といった単位、ヨウ素セシウムといった元素、半減期、内部被曝、外部被曝など様々な事柄が紙面にあふれていました。東京にいるとあまり実感はありませんが、これは授業ではなく現実であり、まだまだ先の見えない状況下で生活を送られている方々がいらつしやることを思うと、自分を含め、少し安易に考えていたように感じられてなりません。

ここまで自分の協会史を振り返り、思いつくまま書きつづけてきましたが、健康診断はこれからもずっと続けていかなければならない事業であると同時に、どんどん新しい取り組みが必要とされる事業でもあると思います。

全日本労働福祉協会もこれから先、70年、80年と続いていくなかで、私の経験が少しでもお役に立てることがあればうれしい限りです。

最後に、40年間お世話になり、元気で過ごすことができたことにまずは感謝申し上げますとともに、全日本労働福祉協会のさらなる繁栄を願い、私の人生一区切りの巻きとさせていただきます。

創立60周年本当におめでとうございませう。



協会のおゆみ

Table of association milestones from Heisei 1 to Heisei 25, including events like 'Association Symbol Mark Decision' and 'Headquarters Second Building Completion'.

社会のできごと

Table of social events from Showa 1 to Heisei 25, including 'Emperor's New Year Message' and '2011 Earthquake'.

協会のおゆみ

Table of association milestones from Showa 29 to Showa 63, including 'All Japan Labor Welfare Association Establishment' and 'Headquarters Relocation'.

社会のできごと

Table of social events from Showa 3 to Showa 63, including 'Nuclear Power Generation' and 'Space Shuttle Launch'.

協会が歩んだ60年の沿革

昭和29年に設立された当協会のおゆみを、当時の社会のできごととあわせてご紹介いたします。